

日医報告

平成30年度 家族計画・母体保護法指導者講習会

北海道医師会母体保護法指定医師審査委員会
委員長 晴山 仁志

平成30年度家族計画・母体保護法指導者講習会は、日本医師会と厚生労働省の共催で、平成30年12月1日（土）（午後1時～4時）に日本医師会館大講堂で開催され、小職が出席した。平川俊夫日本医師会常任理事の司会で、横倉義武日本医師会会長（代読：日本医師会常任理事、平川俊夫氏）ならびに根本匠厚生労働大臣（代読：厚生労働省子ども家庭局母子保健課長、平子哲夫氏）の挨拶後、木下勝之日本産婦人科医会会長の来賓挨拶があった。平川俊夫日本医師会常任理事の座長の下、「女性に寄り添う産婦人科医療のあり方について」のテーマでシンポジウムが開催された。以下その要旨について報告する。

プログラム

日時：平成30年12月1日（土）13：00～16：00
会場：日本医師会館大講堂

1. 開 会（13：00） 司会：平川 俊夫（日本医師会常任理事）
2. 挨拶（13：00～13：10） 横倉 義武（日本医師会会長）
根本 匠（厚生労働大臣）
3. 来賓挨拶（13：10～13：15） 木下 勝之（日本産婦人科医会会長）
4. シンポジウム（13：15～15：30）
座長：平川 俊夫（日本医師会常任理事）

テーマ「女性に寄り添う産婦人科医療のあり方について」

- (1) 妊娠前からの女性の健康課題に寄り添う—Periconceptual Care/Counselingにも目を向けよう—
平原 史樹（国立病院機構横浜医療センター院長）
- (2) 妊娠前からの健康管理について～若年女性へのメッセージ～
甲村 弘子（こうむら女性クリニック院長）
- (3) 妊娠前からの健康管理について—身体疾患を中心に—
鈴木 俊治（葛飾赤十字産院副院長）
- (4) ゲノム医療時代に妊娠をむかえる世代への妊娠前の遺伝カウンセリング
齋藤加代子（東京女子医科大学遺伝子医療センターゲノム診療科特任教授）

- (5) 指定発言—行政の立場から（妊娠前からの就労環境の整備も含めて）
平子 哲夫（厚生労働省子ども家庭局母子保健課課長）

5. 討 議（15：30～16：00）

6. 閉 会（16：00）

シンポジウム

「女性に寄り添う産婦人科医療のあり方について」

1. 妊娠前からの女性の健康課題に寄り添う

—Periconceptual Care/ Counselingにも目を向けよう—

平原史樹（日本産婦人科医会副会長・国立病院機構横浜医療センター院長）

妊娠する女性への心身の状態を、妊娠前（Preconceptional）から妊娠初期にかけて健康管理してケアすることをPericonceptual Careと言う。産科医は妊娠してから本格的に診療に介入してきたが、妊娠前から安心安全な妊娠環境へ誘導し望まない妊娠が生じないように配慮・対応しなければならない。例えば、風疹抗体価の把握、NIPT（Noninvasive prenatal genetic testing）が本当に必要か否か、葉酸摂取の必要性など、妊娠中ではなく妊娠前からの医学的管理とベストな心身環境管理が重要である。妊娠、生殖、性教育、妊娠に備えての身体・心的課題、遺伝、先天異常などの教育が新たな産婦人科診療の中に要求され、産婦人科医は女性が思春期以降、成熟期へと成育する課程の中で妊娠能や妊娠時の課題などに寄り添うことが重要である。

2. 妊娠前からの健康管理について～若年女性へのメッセージ～

甲村弘子（こうむら女性クリニック院長）

プレコンセプションケアとは、女性とそのパートナーに対して妊娠する前から情報を提供してヘルスケアを行うことである。すべての妊娠可能年齢の女性が自分自身の健康管理に取り組むことを促し、より健全な妊娠期・周産期・新生児期を誘導して、次世代の子どもたちの健康を守ることを目的としている。若年女性のBMIは1970年代から右肩下がりで、20代女性の21.5%がBMI18.5未満のやせである。近年、低出生体重児の割合が増加しており、これには妊娠中の体重増加不良と妊娠前の女性のやせが関係している。出生時体重が小さいほど成長後に肥満、糖尿病、脂質異常症、高血圧、メタボリックシンドロームに罹患しやすくなる。また妊娠に影響する代表的疾患のひとつとして子宮内膜症があり、20歳未満の8.3%を占める報告もある。若年女性の月経困難症は多くが機能性であるが、月経痛や腰痛を訴える女性では思春期子宮内膜症も念頭に置いて診察することが重要である。

3. 妊娠前からの健康管理について—身体疾患を中心に—

鈴木俊治（日本産婦人科医会常任理事・葛飾赤十字産院副院長）

プレコンセプションケアは子どもを授かることを計画している人および計画していない人すべてが、

いつか授かる子どものために妊娠前から健康状態を向上させるケアである。プレコンセプションケアは大切であるが、十分でないプレコンセプションケアをカバーするインターコンセプションケア、次の妊娠やライフビジョンを考えたポストコンセプションケアも重要である。慢性疾患や小児期からの疾患(高血圧、血栓症、腎疾患、糖代謝異常、甲状腺疾患、性感染症、風疹)を持っている人が妊娠に向けてどのようにすれば最良の経過になるか、そのためのプレコンセプションケアを中心に概説した。

4. ゲノム医療時代に妊娠をむかえる世代への妊娠前の遺伝カウンセリング

齋藤加代子(東京女子医科大学臨床ゲノムセンター所長・同大学遺伝子医療センターゲノム診療科特任教授)

個人のゲノム情報を調べて疾患の診断、治療、予防を行うオーダーメイド医療は、対象疾患として難病、がん、生活習慣病などであり、ゲノム医療の実用化により経済効率的、効果的医療が実現できる。妊婦が妊娠中に抱く不安、悩みのトップは胎児の状態であり、特にゲノム関連である。不十分な情報のままで採血のみのNIPTも社会に広がっており、妊婦は遺伝カウンセリングなしの結果を受けて後悔することもある。妊娠中は心配や不安が生じ得ることを認識し、妊娠前から正確な医学知識を持ち、妊娠中の相談やアドバイスを受ける体制を作ることが重要である。特に家系に遺伝性疾患を有する場合、妊

娠前に遺伝カウンセリングを受け、情報を得ておく。また偏見のない多様性を認める社会を構築することは当然である。

5. 指定発言—行政の立場から(妊娠前からの就労環境の整備も含めて)

平子哲夫(厚生労働省子ども家庭局母子保健課長)

日本の人口動態をみると2025年に向けて高齢者人口が急速に増加した後、高齢者の人口増加は緩やかになる。一方で、すでに減少に転じている生産年齢人口は、2025年以降さらに減少が加速する。母子保健からみれば、生殖・妊娠期→胎児期→新生児期→乳幼児期→学童・思春期→性成熟期と次世代への育成サイクルという成育の概念が提唱されている。「健やか親子21(第1次)」の目標項目のうち、達成が悪化しているのは低出生体重児の増加と十代の自殺率の上昇である。妊産婦のメンタルヘルスケアの支援、児童虐待防止対策の推進、子育て世代包括支援センターの全国展開、産婦健康診査事業の助成、産後ケア事業体制の確保、不妊治療支援事業の助成など母子に優しい環境づくりを推進していきたい。

その後、会場の聴講者とシンポジウム担当講師との間で活発な質疑応答(母子保健対策関係予算、出産育児一時金、特定妊婦、乳幼児・妊婦健診の情報電子化、低出生体重児の増加、風疹など)があり講習会は定刻通り終了した。

北海道医報ファイルについて

北海道医報本誌を1年分綴ることができるファイルを用意しております。

ご希望の方には無償にてお送りいたしますので、下記まで送付先ならびに希望数をご連絡ください。

記

申込先：北海道医師会事業第一課
〒060-8627 札幌市中央区大通西6丁目
TEL 011-231-7661 FAX 011-241-3090
E-mail ihou@m.douji.jp

